

平塚江南「咲」

難病を患った仲間のために。夏に大きな花を「咲」かせる



平塚江南高校

【住 所】神奈川県平塚市諏訪町5-1【創 立】1921年【甲子園】なし
1921年の創立から旧制県立平塚高等女学校時代を経て、1950年に男女共学の県立平塚江南高等学校になり、現在に至る。硬式野球部は16年には夏の県大会ベスト16に進出するなど、近年は春秋県大会の常連校となっている。

好投手を擁して2016年にベスト16進出を果たすなど、近年は平塚の公立校として健闘が目立つ平塚江南。新チームが始動したばかりの昨秋、ナインに衝撃が走った。

(取材・大久保泰伸)

■ 予期せぬ病の発覚

秋大会直前の8月だった。キャプテンとしてチームを牽引する存在だった井上颯太(3年)の体に、異変が起きた。本人が当時を振り返る。「ずっと疲れやすく、夏バテかなという感覚だった。それが秋の大会直前の練習試合でボールがヒザに当たって、ひどいアザになった。最初は打撲と言われたんですけど、これはちょっと違うなと…。競泳の池江璃花子さんと全く同じ病気でした」

病名は急性リンパ性白血病。即座に入院し、抗がん剤治療に入った。「足が痛くて動けず、ずっとベッドの上での生活だった」。食欲も減退し、体重は15キロ減った。それでも「足の痛みが引いた次の日ぐらいからリハビリを始めた。元気な時はできるだけ動いて、少しでも体力が戻るようにした」。必死に前を向いた。

■ 「あいつの分までやってやろう」

思いも寄らない出来事。チームメイトたちが受けたショックも相当なものだった。部長の高橋宥大(3年)は、電話で知らせを受けたとき「絶句した」と振り返る。「新チームになって、これからという時だったので…。井上は人間ができていて、みんなからもすごく信頼されていた」。前年に教師になったばかりの鈴木健太

監督も、病に倒れた主将の体を気遣うとともに「前チームから唯一、ベンチ入りしていたのが井上。新チームでは1番・サードで、誰よりも声を出す選手でした。周りのみんなを引っ張る存在。間違いなく彼がチームの中心でした」と語る。

沈痛。しかし、逃げることなく病に真っ向から立ち向かう井上の姿に、全員が奮い立った。エースの村松拓馬(3年)も、その一人。「井上が病気に闘っている姿を見て、自分が情けなくなったり、悔しい思いもした。そこから頑張ろうという気持ちになった」。代役主将の高橋は、「井上がいなくなってから、練習の雰囲気が目に見えるぐらい変わった。あいつの分までやってやろうという意識がみんなに芽生えて、一人一人が大きく変わってきた」とチーム全体の変化を強く感じた。

■ スローガンのもとに

迎えた秋大会。予選ブロックを2試合連続コールド勝ち。県大会初戦の相手は、前チームが0対10と大敗した私立の強豪・星槎国際湘南。闘病中の井上はその頃、治療と一時退院を繰り返す日々が続けていたが、体調に問題がない時は練習にも顔を出し、この試合をスタンドから観戦することができた。

思いはひとつ。「星槎に勝てば、また井上が試合を観にきてくれる」。チーム一丸で「本当に気合が入った。1球1球、みんな集中してやって

いた」と高橋。しかし、相手の壁は高く、8回を終えて0対6と敗色濃厚。それでも最終回の攻撃前、鈴木監督が選手たちに「せめて相手のエースを降板させよう!」とゲキを飛ばすと、4番の屋大海(3年)の二塁打で2点を返し、相手投手をマウンド上から引きずり下ろした。「最後に反撃することができて、みんな成長できた試合だった」と鈴木監督は目を細める。

今年のチームには井上が考えたスローガンがある。「咲」という一文字には井上の、そしてチームの願いがこもっている。「このチームで花を咲かせたい。自分たちの中に持っている花を、夏にどんな形でもあろうと咲かせて終わりたい」と高橋。鈴木監督は「試合で結果を出して咲くことも当然だが、自分の弱いところを乗り越えて、人間的に咲いて大人になって欲しい」と選手たちのさらなる成長に期待する。

仲間の支えを受ける井上は「チームのみんなが支えになってくれている。みんなと野球をやっているとすごく楽しいし、このチームに入って良かったと思う」と笑顔をみせる。ここで出会った素晴らしい仲間のために…。夏大会はなくなったが、仲間たちと歩んだ日々は消えない。平塚江南の選手たちが、この先に人生で大きな花を咲かせることを願いたい。

勝ちとし
勝つための秘伝トレーニング

『全員ノック』
平塚江南は、ここぞのタイミングで「全員ノック」で実行する。チーム全員が内野の守備位置に付き、ノッカーから放たれる打球をひたすら処理する。鈴木健太監督は「声を出せないチームだったので、みんなで声を出して励まし合おうというところから始めた練習」と説明する。「日常的なメニューではなく大事だと思う時にやる。最後の練習も全員ノックで締めることになると思う」

スローガン「咲」を実現させる3選手

平塚江南にはチームを引っ張るキャプテンと、部室の管理など学校関係の仕事を行う部長が存在する。部長の高橋宥大(3年=写真右)は、真面目な性格でナインの信頼も厚い。エースの村松拓馬(3年=写真中央)はスライダーが武器の左腕。「この冬は右打者へのインコースのストレートを磨いた。マウンドであの投手は怖いと思われぐらいの覇気をまとえるピッチャーになりたい」。そして難病に見舞われた井上颯太(3年=写真左)には、将来の夢がある。「教師になって、野球を教える立場になりたい。病気になったからこそ、わかったこと、感じられたこともある。これから先もどんな形でもいいので、野球に関わっていたい」と目を輝かせる。3人の選手が、スローガン「咲」を体現する。

平塚江南・鈴木健太監督

ゼロから『1』を作れ!

「野球という競技を通して、人間的に成長してもらいたい。足りない点ももちろんあるが、部活がそれを克服できる時間になればいい。常に言っていることは、出会った仲間を大切にしろということ。キツイ練習を一緒に頑張った仲間とは5年後、10年後でも付き合いは続くもの。もうひとつチームに根付いているのが、『1』を大切にすること。普段の生活で一番手を上げる、野球でも最初にグラウンドに入る、ワンアウトをしっかり取るなど、『1』ができる、自分で『1』が作れる人になって欲しい」

1994年神奈川県生まれ。秦野高-日本体育大。大学在学中の教育実習の間に秦野で野球部監督を務め、18年4月から初任校として平塚江南に赴任。1年間副顧問を務めた後、19年4月から監督に就任した。

